オレにも言わせろ！

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

Vol.104

Make America Great Again!



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

尊敬する人物 偶像には興味なし

1月20日ワシントンDCでアメリカ第45代トランプ大統領の登場だ。アメリカ国民のみならず世界中が彼の一挙手一投足を注視することになる。だが、大統領選が終わった今でもトランプ氏やアメリカに盾突くハンカクサイ野郎がいるのも事実だ。つまりトランプ大統領が尊敬に値するか疑ってかかる選挙権もないのに外野の外の駐車場で騒ぐのは普通に異常なことだ。ではこの日いずる国、日本で尊敬できる人物は誰になるのだろうか考えたい。そこでヒール・ミヤイが高校1年生になったときの話をしよう。

入学式が終わり、周りを見渡すと初めて見る同級生が大勢いる。担任の山本先生から質問用紙を渡された。その中の質問を今でも覚えている。「あなたの尊敬する人物を書きなさい、複数可能」であった。

間違っても父親とは書かない世代だ。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、坂本竜馬あたりが定番の人気者になる。彼らには共通点がある。会ったことも話したこともない人物だ。そんな勝手に作り上げた偶像には全く興味がなかった。私は「田中角栄、リチャード・ニクソン」と書いた。

その結果なぜか職員室に呼ばれた。副担任の鈴木先生の「なぜ田中角栄、リチャード・ニクソンなんだ?」の問いに迷わずに答えた。「**現職の日本とアメリカの元首ですから。彼らを尊敬すると何か問題でもありますか?**」。もちろん先生から反論は発せられなかった。

当時の北海道公立高校の先生の多くは昭和21年設立の反日反米組織である北教組等の組合員で、先生たちも組合員であることを隠すことはなく正々堂々と生徒の前でカミングアウトしていた。

先生からは「こんな日本とアメリカの元首を回答する奴は初めてだ」と褒められているのか脅されているのかわからない評価をその後3年間いただくことになる。

先生のみならず、多くの生徒は反日反米になびく、よく言えば左翼系が多くいると感じた。当然同級生からは「変わった奴だ」と言われたが、私の評価では私以外が変わった奴になる。

私の「輝かしい高校時代」

ほかにもいろいろあった。あるとき2学年下の学生がシンナー遊びで大変なことになった。そこでなぜか私が職員室に呼ばれ、「お前、シンナーを三輪薬局で買ったんだって?」と尋問された。

あ～誰かが俺をハメようとしているな。「この前、倉庫の屋根の塗装を父とや

ったとき塗装用のシンナーを使いました。そんな僕がわざわざお金を出して同級生の三輪薬局でシンナーを買う必要がありますか？　なんだったら明日そのシンナー持参します」と答えると、鈴木先生は一言「帰っていい」となり無罪放免。

本当は当時でもシンナーの知識があり、塗装用はトルエン含量がラッカーシンナーよりも少なく、その手の遊びに効果?が低いことを知っていたが、一般人の先生に高度な説明をして自爆行為になってもつまらないので不必要な反撃はしなかった。

あるとき生徒がまだ多く残っていた放課後の教室でT君がイタズラをして消火器のノズルを握って床に落としてしまった。次の瞬間、私はその消火器を拾い上げ、たまたま開いていた2階の窓から下に投げた。

で、また職員室に呼ばれた。「なんで消火器を投げたんだ?」。教室が真っ白になり大変だと思い…カクカクシカジカ説明すると、その行為は納得してくれたが、今度は下を確認してからやるようにと言われた。

良かれと思った行為も他人が見れば突拍子もない行為になる。将来の組み換え作物騒ぎでも同じような経験をすることになる。

話を戻すと、高校の入学式の日に渡された尊敬する人を記入する用紙のほか、今で言うレジメが渡された。午前11時から「ガイダンスを行なう」とあった。

さて困った。一体全体どんなダンスをするのか？　社交ダンスか？　タンゴか?などと頭の中で堂々巡り状態。ただただ緊張する時間だけが過ぎ去っていく。12時になって入学式は終了となった。

あれ？　ダンスは？　学校の帰りに同じ中学出身と話をした。「良かったな〜ガイダンスの踊りやらなくて…」。やはり横文字に強い奴がいて、そいつは大笑い。お前ガイダンスの意味を知らないのか？

当然の帰結 トランプ次期大統領

などなど私の輝かしい過去をもっとお話ししたいところだが、本題に入る。日本でもアメリカでもトランプ氏が次期大統領になることに驚きを隠せない！との発言が多いが、私から見るとそのような現実を理解できない「超ド級のアホ」がたくさんいることにもっと驚く。**大都市ではトランプ大統領を認めない？　じゃー誰を認めるんだ、ボケども。**

カナダに移住する？　貧乏になりたかったら早くカナダに行きなさい。カリフォルニアはアメリカから独立する？　そんなことやって喜ぶのは3カ国のパスポート所持者になる私の子供たちだ。トランプ氏が勝てたのは…で…だから…なのだと後出しジャンケンのようなTV局の御用コメンテーターの洞察力は明らかに私より低いと感じる。

私は春から本誌を通じてトランプ氏の支持と彼の人気ぶりを伝えてきたが、日本のすべてのメディアはそうではなかった。その理由は簡単だ。自分たちで取材しないからだ。

例えばリベラルで有名なニューヨーク・タイムズ紙は朝日新聞本社内にあるので、どのような報道になるかは朝日新聞に聞かなくてもおのずと結果は分かる。元々アメリカのメデイアも悪い。だってニューヨークを中心とした都市のみを取材したから間違った報道になるのだ。

選挙前にアメリカの選挙サイトがあった。トランプ、クリントンの優勢州を足していくと簡単にトランプ氏が次期大統領になるのが分かるし、私が2月にアメリカにいたときにラスベガスのトランプ・ホテルで**「メキシコとの国境に壁を…」と発言したときに彼の当選を確信した。**その辺のことは5月号に書いているのでもう一度読んでみてください。

ただそのネバダ州においてトランプ氏が敗北したことは意外ではあった。西部州と北東部州はリベラルが多いから民主党になることは決まっていた。オハイオ、ペンシルベニア、フロリダ、ミシガン、テキサスがどうなるのかで決まるのだ。などと現地取材をされトランプ氏の勝利をかなり前から予測できた本誌元副編集長の浅川芳裕さんの『ドナルド・トランプ黒の説得術』は一読に値する。

報道によると安倍首相がニューヨークのトランプ次期大統領自宅で会いプレゼントを渡したらしい。50万円のドライバーは本間ブランド。今は中国資本が入ってしまったが、本間ブランドの本流は「本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」の本間家だ。

戦後1700haを超える農地が強制的に売られ、残ったのはたった4haだと聞く。それを命令したのがGHQである。もしや時代に翻ろうされた者たちの思いとして戦後レジームの終焉のプレゼントとして贈ったのだろうか。もしそうだったら安倍首相はきっと歴史に名を残すことになるだろう。

さてアメリカ民主主義を改めて調べてみよう。そこにはルールに従い物事を選挙で決め、過半数を超えたもので、それを粛々と実行することであると理解する。では**法律よりもローカル・ルールがまかり通るこの国は…。**